

ては、彼は唯カントの *normative Sittenlehre* の唯一神のみを承認した。即ち、詩作するシラーと思索するシラーとの分裂である。「ところで、それにも拘らず、此の唯一神信仰——即ち、古き自然法がそれに於いて壮大な頂點を形づくつてゐるところの此の絶對的・無時間的なカントの道德律——は、二つのイデーによつて、*individualisierend* な思惟方法に近づけられてしまひ、斯くして、*individualisierend* な思惟法が起ることが出来たのであつた」(四三頁)。「シラーの内面に於ける、斯くの如き二つの世界の抱合は、何と驚嘆すべき現象であらう。彼の思想は、*generell* な *Veranmuthung* と *individual* な *Herz* との *Dualismus* をば充分に克服しえなかつた。然し、此の故にひとは彼の云は、*内面的統一* を否定し、彼の發展に對して内面的・有機的な關聯を否認すべきであらうか」(四四頁)。

そしてマイネッケは、次の如き言葉を以て、本書の最後を結んでゐる。「*Generalisierend und individualisierend zugleich hat er auf Mitle und Nachwelt gewirkt.*」(四七頁)。

尚、最後に——私自身の讀後感を附加へることを許して頂くならば——本書に於いて最も興味深く感ぜられるところは、マイネッケがシラーの思想なり個性なりを取扱ふその方法論的態度であらう。此の點から云つて、特に本書の後半の内容は一般にマイネッケの精神史の方法論の具體的展開として——シラーや歴史主義成立の問題を離れて——注意さるべき多くのものを含んでゐるのではなからうか。彼自身も「これは精神史の研究一般に對して方

法論的に意義を有つものであるやうに思はれる」(四五頁)と云ふ言葉を吐いてゐる。こゝで問題になつてゐるのは、*Individualium*, *Typus*, *Generation*, *Tendenz* 等々の概念であつて、マイネッケは、これらの概念が精神史の研究に於いて方法論的に如何に意義づけらるべきかを——シラーの場合を實例にとつて——具體的に教示してゐるのである。こゝに至つては、問題は、もはや單に歴史を考へる人々のみの領域に屬する事柄ではない。一般に、哲學する人々また精神史に何らかの關心をいだく人々に對してもまたひとしく考ふべきいくつかの論題を提出するものと云ふべきであらう。本書の如きは、凡そ何事かを考へ何事かを語らうとするすべての人々によつて必ず讀まれるべきものの一つであると云へないであらうか。(『*Wissenschaft und Zeitgeist*』, Heft 8, 47 Seiten. Felix Meiner Verlag, Leipzig, KMI 1.80). (中山)

○地理論叢 第九輯

京都帝國大學文學部地理學教室編

この論叢も第九輯をみるに至つた。非商業的編輯のものがかく迄生長を續けて來たことについては發兌書院の努力に負ふ所も看過し得ないことと思ふ。初輯より第九輯に至る間には、之にパースペクチブを施せば、この間の變遷と動向を見出すことも難くないであらう。

本輯は研究・報告欄に七の論文を收めてゐる。淺井得一氏「本邦都市の人口地理學的考察」の如き視野の廣いもの、内田勲氏「臺

灣に於る輪中類似の地域について」小葉田亮氏「本邦に於る蜆夷地名「ナイ」の分布」等のそれ自身に於て興味を惹く問題を扱つた小篇、木村憲治氏「滋賀縣の農業地理學的研究」なる力作、庄司久孝氏「臺灣人口の地理學的研究——人口地圖による考察——」及び中江健氏「高知平野の地理學的研究——主に人口を中心として——」なる二篇の人口を對稱とせるもの、和田俊二氏「生駒山脈西斜面に於る水車の地理學的研究」なる工業立地の問題を取扱へるもの等極めて色彩に富んでゐる。

木村氏は急遽本篇並に他の一篇を草して北支征途に就かれたもので、その爲に多少の統一を缺くこと、校正の困難の爲誤植を多く残したことは遺憾であるがその力篇たるを失はしめるものであるまい。この論文は大きなシステムを持つものであるが匆忙の際の執筆に係るので第一、二、三章の自然環境、開發史、農業に於る變遷等は極めて多くの細目に分たれてゐるが尙ディテイルに立入り得なかつたらしい。筆者は貨幣價值を單位に農業經營の形態を明にせんとしたもので土地利用及び經營を多角的な考察に委ね最後に農業經營形態地域區分圖の作成に終つてゐる。之が主として論せられた第四、五章が重心であらう。淺井氏は都市人口の増減を種々に考察するのであるが、その内に於て日本都市の分類について優れた試案を提出してゐられるが尙一考すれば括合されるものを含んでゐるのではないかと思はれる。木村氏にも先述の如く又淺井氏の研究中にも人口増減についてその型態の組合せによる分類が試みられてゐるが、庄司氏にも之が見られ、人口密度、

人口増減、農業指數の組合せによつて形式分類を試みられてゐる。中江氏のはいはゞ地誌學的ともいふ傾向のものである。

地理學が廣い觀察を強ひられ綜合に至る前に分析に於て蹟く憾をなしとせぬが和田氏はこの點に於てよく精到な行論を示されたのは敬服に堪へない。

附せられた京大地理學教室藏古地圖目錄は之によつて一應完結したが、尙古地圖目錄作製について完全なる目錄の編成に要求せらるべき分類方法等將來の研究の材料にもなり得るであらう。

(菊判二七六頁、定價參圓、昭和十二年十二月、古書院發行)

(野間)

○日本民屋地理

島 之 夫 著

我國家屋の研究は各般の視角より行はれたものがあり藤田元春氏には名著「日本民家史」があるが著者はこゝに新しし名稱と共に地理學的研究の一新生面を拓かんとして茲に一書を呈せられた。

第一編序論に次いで第二編本論前編では東亞の民屋なる首章に始まり樺太、北海道、本州・四國・九州、臺灣、朝鮮、關東州、南洋群島、に各章を設け各地に顯著なる民屋の構造を説明されてをる。第三編本論後編は前編が地域別の通觀であつたに對し屋根の傾斜と降水量との關係、家屋の構造に及ぼす雪の影響、屋根の曲線について外國人の見たる日本家屋、日本の家屋と南洋の家屋、の五章を設けてある。

この第二編第三編の章目を擧げたる所によつても著者が東亞に於ける日本として民屋の觀察を行はんとする壯大なプランと、特異の觀察方向を窺ふに足る。但し各章が殆どいづれも獨立の文章で夫々異なる機會に書かれたものであること又單なる記述の範圍をあまり出てゐないこと等尙充分な比較研究の餘地を残してゐると思はれる。この點については第四編餘録中に奈良盆地の民屋を論ぜられ、「大和棟は大陸文化の遺物也」と結論されてゐる所に於て著者の比較眼を示してをられる。

全編を通じて極めてヒントに富み、之が礎石となつて建設されるべき日本民屋地理の希望多きを約束してゐる。(菊判一九四頁、昭和十二年十二月、古今書院發行)〔野間〕

○先史地理學研究

小 牧 實 繁著

歴史地理學界に於ける京都帝大地理學教室の傳統と位置とに就いては、今事新しく述べるまでもあるまい。本書は同教室の代表者小牧博士の近業として、氏の到達せられた歴史地理學論の最も新しい段階を詳述せられたものといふべく、此處に地理學の立場よりする歴史地理學の正しき方向の指示を得たことは、われわれ歴史學の立場に據るものにとつても大いなる關心事と言はざるを得ない。

本書は第一部「先史地理學の理論」と第二部「先史地理學的研究」の二部よりなり、第一部に於いては、先づ著者の立場が地理學徒

として先史地理學を地理學の理論によつて考へ、それを地理學の基礎に立つて理解しようとするものであることを明らかにした後(一、緒論)、地理學が單に人文現象の地盤としての土地を取扱ふもの、或はまた單に自然物としての土地を研究するものではなく、統一的全體としての、景觀の意義に於ける土地・地域を對象とするものであつて、景觀を構成する自然現象・人文現象を景觀に即して相互關聯的に、統一的全體的に見るべきものであることを明らかにし(二、地理學)、從つて亦歴史地理學は、歴史時代の任意の時の斷面に於ける土地・地域(景觀)の描出を以て理論上の目的となし、而も便宜的には過去の景觀を明らかにすることによつて現在に於ける景觀を研究の對象とする地理學への基礎づけ、背景づけを導く所にその使命を見出すべきことを力説してゐる(三、歴史地理學)。

さてこの歴史地理學の章は著者の最も意を用ひられた所であつて、從來歴史地理學の名目によつて考へられ來たつた所の諸々の學說について批判を加へ、特に歴史の舞臺としての土地の研究、地人の相關即ち歴史と地理との交渉の研究の如きは寧ろ地理學者的歴史家または歴史哲學者の側にまつべきものであるとし、歴史地理學の職能は過去に於ける土地を描出するを以て足り、たゞその描出に當つて人間歴史の發展の過程を見るのが望ましいのみであると論じられたのは傾聴すべきであらう。

しかるに歴史時代の或る時の斷面に於ける土地の描出は、その時を靜態として取上げるか動態として選ぶかによつて異りたる結